

鷹取山

甲賀俊男

山の端に月は残り朝行を知らず太鼓は鳴り轟くも
夕ばれの鷹取山に霧深しひぐらしの聲遠くきこるつ
雷雨は止めど流れの激しくて小砂利刎飛び草ゆすりつ
雨晴れて生桓越しに子供らが落葉の中に栗拾ふ見ゆ
兄も征き弟も召されし故里に老ひたる父のひとりぬ給ふ
鈴虫を捕へむとわが近づけば一つなき止み遠くには啼く
蟋蟀が吾が枕べに鳴きたちて久しくやめず眠れざりけり

四季の思出

中村貫一

春

ふと見れば庭のかたへにつつましく乙女椿は咲き出でにけり
草に寝て見上ぐる空の花曇り春の想のひそけさに入る
吾が庭の乙女椿はつき／＼に咲きてこぼれて春たけにけり

至つては全く力盡きて、六月二日母は静かに逝つた、私は思ひを祖母の上に馳せる。いつかはこの日の来る事を豫期してはゐたであらうけれど、實際にこの報らせを受けつつた時祖母の心痛は如何ばかりであつたらう。親が子を送らねばならない、子に先立たれた母としての云ひ知れないものに。

去年の秋、丁度二學期の試験が始まる前日だつた、山は漸く寂しさを催す頃、又しても私は祖母の死に逢つた、母を失くしたからの私はこの祖母を唯一の心の頼りともして一層親しさを感じてゐた、それだけにこの事は私にとつて大きな心の痛手であつた。自分獨り捨てられた様な、今迄もつてゐた一切の望みをも失なつてしまつた様な、暗い冷たい氣持にさせられたのだつた。

さつきから私は机の上にかざられてゐる祖母の寫眞をながめ乍ら、ありし日のやさしい哀れた祖母の面影を偲んでゐた。ひっそりした部屋の中ではたゞ時を刻む時計の